

平成25年度 わくわく市民懇談会

- 1 日 時 平成25年6月26日(水) 午後3時～午後4時
- 2 場 所 中野市市民会館2階 41号会議室
- 3 出席者 中野市職員OB会 25名
市長、随員職員
- 4 次 第
 - (1) 開会(高見澤副会長)
 - (2) 主催者代表あいさつ(塩崎会長)
 - (3) 市長講演「これから期待したい ～中野市の未来に向けて～」
 - ・冒頭のあいさつ・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
 - ・自己紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
 - ・市を取り巻く環境変化・・・・・・・・・・・・・・・・3
 - ・人口減少について・・・・・・・・・・・・・・・・4
 - ・人口減少時代の **Policy of Local Administration** ・・・・4
 - ・中野市の政策展開の視座・・・・・・・・・・・・・・・・6
 - ・北陸新幹線と地域間競争・・・・・・・・・・・・・・・・6
 - ・北陸新幹線の輸送効果・・・・・・・・・・・・・・・・7
 - ・北陸新幹線による時間距離変化・・・・・・・・・・・・7
 - ・余剰輸送力・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
 - ・信越9市町村のポテンシャル・・・・・・・・・・・・8
 - ・地域を豊かにする経営思想・・・・・・・・・・・・8
 - ・政策ディメンション・・・・・・・・・・・・・・9
 - ・地域づくりのイメージ・・・・・・・・・・・・・・9
 - ・変わらないのが異常 変わるのが常・・・・・・・・10
 - ・未来を感じ予測する・・・・・・・・・・・・・・10
 - (4) 閉会

「市長講演」

冒頭のあいさつ（わくわく市民懇談会について）

- 今日は「わくわく市民懇談会」ということでお話させていただきたいと思いますが、私が今、外で話していることを皆様方にもお話申し上げて、今の市長はこういうことを考えているのかということをお伝えしたいと思います。

- 市長に就任しまして5ヶ月が過ぎました。
その間、いろいろな市内の団体等へお話をさせていただく機会をたくさんいただいております。
とにかく驚いたのは、市内のたくさんの方が、いろいろな想いでそれぞれの分野で活動されているんだなあということをつくづく考えさせられました。

- それから、役所に入りましてから、皆さん優秀な方が本当にたくさんいらっしゃるということを実感いたします。
お願いする資料等が、待たなしでどんどん提出されます。
それから、いろんな報告も頂戴します。
考え方もきちっとした中でやってらっしゃることが良く分かりました。
その中で、私がちょっと思ったことを交えながら、今日は中野市の未来に向けてということで、壮大な話で恐縮ですが、お聞きいただきたいと思います。

自己紹介

- 私は高校を卒業してから、最初は埼玉大学経済学部に入りまして、うろうろしていたんですが、親父に内緒で大学とは反対の方向に歩いて予備校に通いながら、いろいろ自分のやりたいことを考えるということで、一橋大学に落ち着きました。
社会学部に入ったんですが、4年間学びながら経済学を専攻して、横浜銀行に就職しました。

- 横浜銀行では10年間ほど営業店、本部企画等々で勤務し、ちょうどブラックマンデーの頃に東京の企画部におりました。
そこで肩を叩かれて、総合研究所を作れと言われたのが昭和63年、1988年です。
それ以来ずっと、研究所の仕事をしていたということで、取引先も行政の関係が多くて、横浜市とか神奈川県というような形で、営業をしておった人間です。

- そんな中で帰ってきまして、父の関係でいろいろしているうちに皆さんに声をかけられて市長になったということです。

市を取り巻く環境変化

- 今、考えていることは次の4点です。

- 1つは人口減少社会に入ったということ。構造的にも入ってきているということで、何かしらの手立て、手法、考え方を変えなきゃいけない。
経済学用語、社会学用語で言うパラダイムチェンジというものを考えていかなければいけない。

- 2番目は、これは直近の課題で、2年弱に迫った北陸新幹線に対応する何かしらの策を中野市としても考えなければいけない。

- 3番目はグローカリズムの実践。これは皆さんに訴えているんです。
もうご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、「軸足が地域、思考はグローバル」ということで、とにかく広域、広範囲で物事を考える癖をつけましょうということですね。
中野市の外国人登録者が六百八十何名余と聞きました。
それだけ、人口減少下で海外の人がこの中野市に仕事をしに来ているという現状。
これに対して、私たちは、異文化交流じゃないんですけど、そういった時代に突入しているということです。
ましてや、北陸新幹線が引けることによる首都圏、いわゆる人口密集地との時間距離も差が無くなりつつある。実はこの恩恵を受けているはずですね。
昨日も、ある会合で言われました。「中野市は田舎ですか？」私は反論しました。「田舎ではありません。」そういう形で反論しました。

- 4番目が豊かさの変容ということで、経済学の中には、水がキレイだとか、水資源が豊富だとか土壌が豊かだとか、暮らしの質とか、気候の安定といったものは入っていません。カウントされない。経済学は付加価値の体系ですから、経済的な活動だけを測定している。総務省等では、暮らしやすさ指標というようなものを発表していますね。全部指標化しましょうと。そうすると富山県あたりが第1位になりますが、その要因は何かといたら、一戸あたりの住宅の床面積が広い、というようなことを研究したことがありました。

- 中野市も地域力という指標では、朝日新聞から出ている民力という統計の中で、中野市は民力が高いと出ている。その高い中身を分析しますと、これも皆様方ご先輩のおかげだと思いますが、実は中野市は非常に公民館とか地区のそういう施設が多い。地域の活動を支える集会所等がたくさんあるということで、民力が高いということで私は考えています。

- いずれにしても、経済的な付加価値に載らないところでの豊かさというのが、どんどん世界的にも変わってきています。

人口減少について

- 日本の人口推計、高齢化率について。どのくらいの方が65歳以上かという数字ですが、中国とほぼ一緒で、これから中国もどんどん伸びて来ますが、それ以上に日本の高齢化が進んでいくという世界が描かれています。統計の中で、いろんな経済統計、社会統計がありますが、一番当たるのは、人口統計です。

人口統計はほぼ間違いなく当たる。この統計を、これからやってくる世界と考えて、肝に銘じて対応していかなければいけないというのが私の考えです。

- 中野市の人口減少について。子どもたちがだんだん減っています。年齢構成を百分率に直すと、昭和35年、今から半世紀前には、子どもたちは32.5%。これが平成24年には13.8%に減少している。高齢者は昭和35年に7.2%だったのが、平成24年には26.5%に増加している。構造の変化が進んでいます。

これをさらに分析していくと、生産年齢人口で老年人口を除いた老年人口指数。

稼いでいる人たちが、どのくらいの人が割合を担っているか、支えているかという数字。昭和35年は11.9%です。当時の街中には65歳以上のひとは10人に一人だった。平成24年では、10人中4.5人が65歳以上。これだけ急激に、戦後、高齢化が進んできた。こういった中で、先輩の皆さんが、行政に携われてこられ、色々な施策がその中でとられてきたということでもあります。

- 日本の人口が長期的にみたらどうだったのかということ、インターネットや、総務省の人口問題研究所の推計によると、鎌倉時代は700万人。江戸時代の天保のあたりで3,000万人。日露戦争で5,000万人。1億2,700万人でピークアウトして、ずっと落ちている。戦後日本経済というのは、人口が増加することで生産性を上げ、付加価値を高めてGDP・GNPを上げながら高度成長期を迎えて、とにかく成長という路線できました。これがピークアウトして減っていく時代です。基本的には、物事を考えるときにこれからどうするか。これまでの考え方を踏襲していたのでは、新しい政策が打てない。これまでと同じことを考えてベースにトレンドを描いて、将来予測の線を引っ張っても描けないということです。考え方を変えなきゃいけない時代だなと思っています。

人口減少時代の Policy of Local Administration

- 私が考えているのは結局、大きな意味で経済社会とは人間を中心としているのですけども、人間が少なくなることによって、財政とか医療崩壊とか、これは過去のトレンドから何かを考えるような政策転換、構造転換をしなければいけないと思うんですけども、こういった問題が出てきた。どうしてもやっぱりここで、総合政策、総合地域

政策研究みたいなことを皆さんで、中野市はどうするかということと一緒に考えてほしい。誰よりも先に考えてほしい。それが実は中野市を有名にすることで、もっと言うとは私は、選挙の中でも言いましたが、交流と協働と連携で世の中は良くなる。

- 交流が増える、人が増える、人が通過してくれるということはそれだけ、お金を落としてくれるということです。それから連携は、少なくなってきた人口の中で、やっぱりお互い協力し合って知恵を交換し合って、知の共有をすることで、知の連携をすることによって、これからいろいろな諸課題に対応していく。
- それから最近では、民間の力を借りようという話があります。行政には職員が少ないということになると、地域の人々の市民力によって、地域を支えていくといった対応が必要になる。こういったことから、いろんなところで言われていることを拾って来ると、こういうことが言えます。
- 1つは、これは私の考えです。昔は企業誘致でしたが、これからは起業人誘致だということです。人材を中野市に呼んで来るような仕掛け、仕組みを作りたい。中野市に来れば、そういった知恵が享受されて、起業が出来るということで、若者が寄って来ると。これは長野県知事も考えているかもしれませんが、ちょっと私は具体的に考えています。
- 例えば、つい先ごろ報道でございました。19歳から30歳くらいまでの間で、働いていない若い人達が日本全国で330万人いるという話です。この人たちはいったい何を考えているのかと。それまでの教育の問題もあったかもしれない。ご家庭の環境もあったかもしれない。日本自体が空洞化したから働き口がないのかもしれない。
- 労働のミスマッチとって、やりたいことと、できることがミスマッチで就職していないのか、いろいろあるかもしれませんが、いずれにしても、そういった人たちがいるということは、そういう人たちに、起業する、働くことがどれだけ魅力的なことなのかということをお教える、そして実際に起業家として育ててもらう。そのためには、地域では高齢化の中で、もっと住みやすくして行動しやすいような公共交通政策も考えなきゃいけない。
- 都市計画もコンパクトシティというような形で、より効率的に配置をして住んでいくような姿があるべきだろうし、市民参加もそうです。商工会議所が信州中野商工会議所になりましたけども、シティセールス、やっぱり知ってもらいたいこと。知ってもらってまず認知。認知してもらって食べてもらったり来てもらって、知ってもらって、それで関係が出来上がっていく。シティセールスをどんどんやりたい。農産物以外にも中野市にはたくさん観光資源があります。それを宣伝していきたい。

- あとは連携による文化戦略。広域連携。自治体経営改革、ここでは、一つ考えているのは、中野市には公社がございませぬけども、もう少し行政でも儲けてもいいじゃないかと。神戸市の六甲の水と一緒に。行政は確かに出来ませぬけども、公社とかを利用することによって商売の機会はあると考えている。そういう目で経営改革が必要。こういったことを政策研究でやっていきたい。

中野市の政策展開の視座

- 整理すると、人口減少と、直近では北陸新幹線があつて、こういったものが地域間競争・都市間競争になります。
- 今後の人口減少が進む中で、中野市が北信地域の核としてあり続けるためには、どうしたらよいか。それを今、手を打たなければいけないというのが私の想いであり、モチベーションになっています。

北陸新幹線と地域間競争

- 長野から金沢まで 1 時間で行けるようになります。そうなる何が起るかということで、JRの常務さんの話を聞いたときに、広域で考えて下さいということです。それは、富山駅の南の、五箇山、白川郷、飛騨高山、この圏域の人たちが一緒になって、今や観光で燃えあがろうとしている。それと同じで、信越 9 市町村の、上越自然国立公園等によって挟まれているこの地域も、ものすごく良い土地であるということをもみんなで認識し、一緒にこの地域を売り込みましょう。売り込むのはインバウンドです。世界に対して売り込みましょう。首都圏とか東京とかって言う前に、世界に対して売り込む要素が、中野市にはあるということです。このエリア、圏域には。
- その一つが、長野県は長寿であるということです。長寿日本一ですね。日本一ということは世界一です。なぜ長生きなのかということが色々分析されています。高山村に順天堂大学の白澤教授が入って調べたら、住んでいる方の細胞をとったら、遺伝子の中で、寿命を司るテロメアという遺伝子が異常に長いと。他と比べると格段に長い。それがなぜなのかということで医学的に調べているそうです。
- 世界に対してとにかくあこがれの地なんです。今、世界は健康長寿がどの国にとっても憧れになっています。だからそれに呼びかけてインバウンドで来てもらう、仕掛けていくことが重要じゃないかと。9 市町村で連携して圏域で考えましょう。ちなみにこのエリアっていうのは、志賀高原、北信五岳があり、本当に風光明媚な、世界的に、誰が見てもきれいだって言います。特に中野市から見る北信五岳が最高ですね。

- あと、もうひとつ加えなければいけないのが、長野から金沢までが1時間。
今はもうこの先の工事が始まりまして、土地買収も始められていって、敦賀までが今から10年後につながります。日本三景の天橋立は、今までは京都まで出て6時間くらいかけて行っていたのが、2時間半くらいで行けるようになる、というくらい時間と距離が縮まってくる。

北陸新幹線の輸送効果

- 長野新幹線の1日の利用者数は開業前が2万人弱に対し、開業直後には25%増加して、9年目には、42%増加した。北陸新幹線は、現在の8両から12両編成になります。1車両100名定員で4両増えるので400名。現行1日27本ですので、計算すると10,800人増加する計算になります。従来富山方面に行く人は上越新幹線に乗って、越後湯沢経由でほくほく線に乗り換えて富山へ行っていました。こういった人たちが振り替わって来るということでJRは計算しているんじゃないかと思えます。
- 平成15年度、輸送密度が7,400人。ほくほく線は90%の方が北越急行の特急に乗っているそうです。ということは、ほとんど通過で富山に向かっていた人が北陸新幹線に振り替わって来るということですね。直江津経由の特急「はくたか」ですね。

北陸新幹線による時間距離変化

- 以前、首都圏の方ばかりでなく、関西の方はどうなのかと聞かれたことがあり、調べたんですが、新大阪から米原経由で、ひかりに乗って米原へ出て、特急「しらさぎ」で金沢まで2時間半です。金沢から信越9市町村エリアまでが1時間です。
ということは、新大阪から乗り継ぎさえうまくいけば、3時間半で長野までやって来てしまいます。新幹線ですと、のぞみで2時間40分、東京に出て1時間30分かかります。
- 要するに、北陸を回った方が関西は近くなるということです。結局関西圏とのつながりが、ぐっと長野県は、中野市のこの辺りは近くなるということです。かつて小さい頃、志賀高原に行くと、関西からのスキー客が多く、よくお話ししながら夜間瀬スキー場で滑った記憶があります。そんな世界が、スキー客が増えるってことがあるんじゃないかなと思います。最近では、スキーをやる人がいないということに対しては、これはまた別の戦略がありますが、この場では控えますけども。
言ってみれば、時間・距離が新幹線によって革命的に変わって来るのを、私たちは関係ないとは言っていないということです。

余剰輸送力

- これは裏付けとして鉄道研究所の人が言った言葉ですけども、余剰輸送力という概念がありまして、東京からあさまにのります。高崎でおります。軽井沢でおります。席がどんどん空いて来ます。こういうのが余剰輸送量と言いまして、こういうところに近畿日本ツーリストとかJTBとかがパック旅行を安く組むわけです。新幹線料金が7千円かかるところを、三千円くらいで、なおかつ旅館をつけて。1泊いくらでツアー旅行を組みます。東京からでも出来ますが、実は関西方面からやると、もっと余剰輸送力があるのではないかというのが、鉄道研究所の方の意見でした。
たぶん関西から信州に向けて、ないしは軽井沢方面に向けてのパック旅行が増えるということで、空席を埋めるために、そこにビジネスが入り込んでくる。

信越9市町村のポテンシャル

- これは、市民の皆さんにこの地域はすごい、もっと自信を持ちましょうというお話です。総面積9市町村を合わせると1679k㎡。これは、愛媛県の89%、約9割です。可住地が431k㎡ですから、奈良県の半分あります。人口は15万人で、上伊那郡で10万人程度です。
- ただ、ここで、皆さんに自信を持っていただきたいのが、製造品の出荷額をみると、高知県の6割程度、この地域で製造業をやっているそういう地域であるということです。これが、新幹線の開通により、絶対変わります。今でさえ、商品販売額は鎌倉市の8割ぐらいです。これから、観光客が入ってきたら、鎌倉市をはるかに超えるぐらいの商品販売価格を達成できるポテンシャルをもっている地域がこのエリアだということをご認識してください。
- まず変わって欲しいのが、私達が自分の地域に自信をもつことです。自信を持てば、笑顔があふれ、笑顔があふれると他所から来た人に優しい対応ができる。いいことは、自信を持ち、縮こまっていたは、いけません。中野は外から見たら、大変なポテンシャルを持った地域です。

地域を豊かにする経営思想

- 松下幸之助さんの言葉で「理念のないところに経営の成功はない」があります。地域経営や地域創造の担い手には一定の識見と理念がなければならない。この理念とは何か。それは、私達はみんながこのエリアをこうしたいと明確に持つことです。中野市には天領、高梨さんの歴史的な背景があります。そう言ったものを、私達は、もっと身近なものとして発信していかなければなりません。
- 北信固有の地域文化、食文化、服飾文化、社会慣習等を発信し、自然な形で外の人を

お迎えすればいいはずですが。中野市にしかない、絶対的な価値、あるべき姿は私達の周りを見渡した時に、いろんなヒントが隠されているはずですが。

- 地域の重要性という中で、ランドデザインとはどんな暮らしができる場所を作りたいのか、どんな働きをするまちを作るのか、これを考えること。他所とは違う差別化を図ることです。

政策ディメンション

- 予算を組む中で、すべて交流連携を中心に考えています。例えば、中野市で音楽会をやる。その時に、市民だけでやるのではなく、外の人を呼んで一緒に音楽会をする。それだけで、つながりというものができます。そして、継続して交流をし、連携していかなくては行けない。
- 今、9市町村では健康ツーリズムに取り組んでいます。この地域に来て、おいしいリンゴとぶどうとえのき氷を食べて1ヶ月住んでもらったら、寿命は3年伸びるとウェルネスを売る。
- 観光（サイトシーイング）ではなく、ツーリズム、その地域に少なくとも複数日滞在してもらいその人達と一緒にその暮らしの中で過ごす。インバウンドで考えているのは、1ヶ月以上滞在してもらいたい。そのしかけを9市町村で商品化し、世界に発信することを考えています。その受け皿を中野がある一定の領域をやらないと成功はしません。果物は中野市でしかとれない。きのこもある。花もシャクヤク、バラがある。そういった農産物に限らず、提供できるものが中野市は豊富であり、その中心として中野市が存在できると考えています。

地域づくりのイメージ

- 市がああやれ、こうやれと指示するのは高度成長期はよかったが、これからは、みなさんの協力が必要で、21世紀の共通のキーワードになってくるのは、持続可能性です。上から与えられたものは、疲れてくるとマンネリ化し、これは市が考えたものだと、だんだん消えて行ってしまう。
- 改革はその地区で考えてもらったことを市が支援し、共同して地域の地区を後押しする。その寄せ集めたものを、存在価値を明確にし、差別化できるようなものとして中野市のブランドとして後押ししていきたい。これは今後具体的に政策に掲げていきたいと考えています。
- 地域活性化に向けて、観光施設・産業施設・協働支援など、いろいろな話からデータを集めどうやったら連携できるのかを考えています。

- 小布施の岩松院から先、中野市へ入ってくる人は、ほとんどいない。岩松院まで、たくさんの方が来ているのに、今そこにあるマーケットを引き寄せる努力をなんでしないのか、それを考えている。中野市にはたくさんの方の見てもらう場所がある。それをぜひ宣伝したい。

変わらないのが異常 変わるのが常

- 最後に私達は変わらなくてはいけない。変わらないのが異常で変わるのが常です。変化・変容する社会の未来を見据えて先取りの気負いで取り組む。
- これは、市の職員にも言っていることですが、地図を逆さまにみてください。目先を変えると見え方も変わります。初めて、日本海側に本格的な新幹線が通る。これはすごいことです。
- 飯山駅ができて、綱切橋を渡って中野市に入ってくると放射状にどこにいても観光地があります。今考えているのは、飯山駅の待合室で中野市を宣伝したい。飯山市で降りる人は、いわゆる今の観光地である野沢温泉とかこれまでの観光地へ行くだろうが、待合室で信州中野の自然や花や観光地をきれいな映像で流す。そうすると、今回は、野沢温泉に来たが、今度は信州中野にまた来ようと思わせたい。谷巖寺の桜もすごい。私達がいつも見ている風景は外の人から見るととてもすばらしく見える。中野の銀座通りは真正面に高井富士が見える。こんな景色は見たことがないと言われた。

未来を感じ予測する

- 五感をフルに活用すると予測することが可能になります。変化を未来に向かって考えなくてはなりません。今、60歳を迎えた人たちの7割の程度の方がIターンやUターンをするのがほとんどです。地域には安らぎや、癒しがあります。伝統的なコミュニティ生活・価値観・穏やかな個人主義がプラスされ、個性豊かな社会で穏やかな社会が求められてくる。
- アメリカのウェストバージニアの写真と千曲川の写真を見比べても、千曲川の写真はとても絶景です。
- 基本で忘れないでほしいのは、とにかく自信をもつことです。すばらしい人材を率先して作り、これを、うまく情報化し、共同して、視野は広く海外へ向けて情報を発信していきたい。そうすると、私達は必ずや世界的なエリアの中心地となるはずです。

質疑応答 質問事項なし